

阿波國 すきま 漫遊記

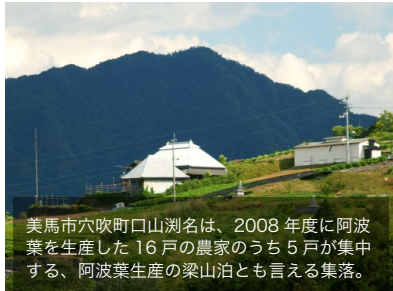
— 関東からの転入者による徳島再発見 — VOL.5



■阿波葉生産農家・元山勝市さんの畑
青々とした阿波葉は遠目にも見分けができる。畑のそばに立つと、空気にチョコレートのような独特の甘い香りがする。



阿波葉は、外来種には不向きな標高の高い地域でも生産できる。徳島に適応した品種なのだ。



美馬市穴吹町口山測名は、2008年度に阿波葉を生産した16戸の農家のうち5戸が集中する、阿波葉生産の梁山泊とも言える集落。

阿波葉との出会い

半田町をドライブしていたとき、ばたに青々としたタバコ畑があるのに気付いた。「もしかしてこれ阿波葉？」車を止めて仕事中の農家の人に話を聞くと確かに阿波葉あわはだという。そのとき話を聞いて以来、私はこの品種に興味を持つようになった。

阿波葉はキセルで吸うための刻みタバコの品種で江戸時代初期から日本で作られてきた在来種のタバコだ。現代の紙巻きタバコに使われているのは昭和初期に導入された黄色種と呼ばれる外来の品種である。

消えゆく品種

明治大正時代に東西部地区に大きな富をもたらしたタバコはまぎれもなく阿波葉であり、「阿波」の名を冠するにふさわしい作物なのだ。だが時代の趨勢でかつて一万人以上の農家で栽培さ

れていた阿波葉も今年はずか十八戸で育てられているにすぎない。しかも阿波葉は二〇〇九年年度で生産が打ち切られることになっていく。タバコは専売だから農家がいくら希望しても生産を続けることはできない。

独特の文化

阿波葉と黄色種では収穫後の熟成の方法が大きく異なる。機械化が進んでいる黄色種に対し阿波葉の熟成は手作業が中心。このため阿波葉の生産には独特の仕事、言葉、道具、建築をもな

◀「ムッシャ(蒸屋)」と呼ばれる乾燥蔵とは機能・構造がまったく違う。



古い形態のムッシャは室内に炉があり、床下(地下)から通風するための焚き口があるのが特徴だ。▶



阿波葉の特徴は、屋外での乾燥と低温で長時間をかける発酵工程。収穫期には農家の庭先を葉が埋め尽くす。

う。私が阿波葉に魅かれるのは阿波葉がこのような文化を持つからである。つまり阿波葉の消滅は単なる品種の切り替えではなく、四〇〇年続いた文化が二〇〇九年を境に消滅することを意味しているのだ。

まだ遅くはない



「連縄(れんなわ)」という縄にタバコの葉を一枚一枚編み込んでいく。▶



◀急斜面で栽培されることが多い阿波葉の収穫にはシュロ縄で編んだ「もっこ」が活躍する。



「連干し(れんぼし)」この光景が見られるのも来年までだ。

実は、阿波葉の生産が中止されると決まったとき、もし途中で生産農家が十戸を下回った場合は二〇〇九年を待たずに中止するという内示があったという。阿波葉は手間がかかるうえ農家の高齢化も進んでいるため生産も年々困難になってきたからである。しかし阿波葉農家はこの品種を見捨てることなく最後まで誇りを持って生産を続けてきた。おそらく来年もほとんどの農家が生産を続けることだろう。もしこのレポートを見て少しでも興味を持つたらまだ遅くはない。この号が書店に並ぶころ東西では阿波葉の収穫が最盛期を迎えているはずだ。まだこの誇り高い品種の最後の姿を目に焼き付けることができるのである。